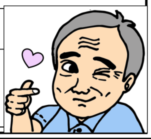
国語学習プリント　　date：　　年　　月　　日

学習内容：随筆の味わい ―枕草子―

春はあけぼの

＿＿年＿＿組＿＿＿番

氏名



枕草子

清少納言

春はあけぼの

春は①あけぼの。②やうやう白くなりゆく A山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびき③たる。

夏は④夜。月のころは⑤さらなり、⑥やみもなほ、蛍の⑦多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、⑧ほのかにうち光りて行くも⑨をかし。雨など降るもをかし。

秋は夕暮れ。夕日のさして B山の端⑫いと近うなりたるに、烏の寝どころへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさへ⑩あはれなり。⑪まいて雁などのつらねたるが、⑫いと小さく見ゆるは、⑫いとをかし。日入りはてて、風の音、虫の音など、⑬はたいふべきにあらず。

冬は⑭つとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず、霜のいと白きも、また⑮さらでもいと寒きに、⑯火など急ぎおこして、炭もて渡るも、いと⑰つきづきし。昼になりて、⑱ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も、白き灰⑲がちになりて⑳わろし。

【第一段】

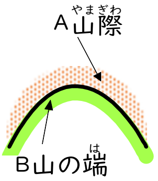
随筆＝文学における一形式で、筆者の体験や読書などから得た知識、情報をもとに、それに対する 感想・思索・思想をまとめた散文である。

▽①あけぼの＝夜明け方　　②やうやう＝しだいに　だんだんと

▽A山ぎはと B山の端の違い

A山ぎは＝山に接する付近の空

B山の端（は）＝空に接する部分の山（山の稜線（りょうせん））



☞③たる。について・・・・存続の意を持つ古語助動詞「たり」の連体形なのだが、文末であるのはなぜだろうか？

※係り結びではありません。なぜなら、文中に「なむ」や「ぞ」がないからです。

ではどうとらえたらよいのでしょうか？

Answer ←これを 連体形終止（連体形止め）　といいます。

余韻を残す役割として用いられるといわれます。根源的に考えると、「**省略**」の一つの形と考えた方がわかりやすいかと思います。あとに続くべき言葉が省略されているのです。「体言止め」（名詞で終る句末となる）も「省略」の一種です。

【例文】 **僕が住む町は東京。**〔体言止め〕

「僕が住む町は東京だ。」の「だ」を省略したもの

連体形終止は、その連体形の語のあとにくるべき「体言」も含めて省略していると考えればよいでしょう。つまり、あとに言葉が隠れているのです。言わずもがな（あえて言うまでもなく）の内容なので省略しているのでしょう。言わずに省略するということが余韻・余情を残すという解釈につながったと思われます。

▼では、考えて見ましょう。次の二つの文のあとに隠れている言葉とは

春はあけぼの　　をかし。（こそ　をかしけれ。）

紫だちたる雲の細くたなびきたる　　をかし。

▽④月のころ ＝ 月が出ている（明るい）とき

▽⑤さらなり ＝ 「言ふもさらなり（言うのもいまさらだ）」から　言うまでもなく

▽⑥やみもなほ とあるが、何に対してのやみなのか　月のころ　（月が出て明るいとき）

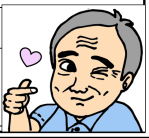
国語学習プリント　　date：　　年　　月　　日

学習内容：随筆の味わい ー枕草子ー

____年____組____番

春はあけぼの　その２

氏名



枕草子

清少納言

春はあけぼの

春はあけぼの①。やうやう白くなりゆく②山ぎは[A]、すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる③。

夏は夜④。月のころはさらなり⑤、やみもなほ⑥、蛍⑦の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかに⑧うち光りて行くもをかし⑨。雨など降るもをかし。

秋は夕暮れ。夕日のさして山の端[B]⑫いと近うなりたるに、烏の寝どころへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり⑩。まいて⑪雁などのつらねたるが、いと⑫小さく見ゆるは、⑫いとをかし。日入りはてて、風の音、虫の音など、はたいふべきにあらず⑬。

冬はつとめて⑭。雪の降りたるはいふべきにもあらず、霜のいと白きも、またさらでも⑮いと寒きに、火など急ぎおこして⑯、炭もて渡るも、いとつきづきし⑰。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば⑱、火桶の火も、白き灰がち⑲になりてわろし⑳。

【第一段】

▽蛍⑦の「の」は何を表す「の」か？

主格を表す「の」（主語を表す「の」）＝「が」に置き換えられる「の」

◇これと同じ「の」をさがそう

雲の　夕日の　烏の　雁などの　雪の　霜の

▽ほのかに⑧＝かすかに

（古語 形動「ほのかなり」の連用形）

▼をかし⑨＝良い　趣がある　すばらしい　素敵だ　風情がある

※古典における美的理念のひとつ

▽三つ四つ、二つ三つ　とは

a 何の数　烏

b 二つから四つではないことからわかることとは

最初に三羽四羽、しばらくして二羽三羽　時間差

▼あはれ⑩＝しみじみとした趣がある　風情がある

※古典における美的理念のひとつ

ここで鋭い人は気づいたでしょう。「をかし」と「あはれ」どう違うのかと。趣（おもむき）って何、あはれのしみじみって何よ？と。

◎**をかし**　個の心情という内面に入り込むのではなく景観的・客観的にとらえた、どちらかというと乾いた陽性の指向性を持つ美の価値観（心が晴れる良さ）

◎**あはれ**　個の心情という内面にあてつつ、主観的・観念的にとらえた、どちらかというと湿った陰性の指向性を持つことの多い美の価値観（心にしみる良さ）

◆なぜ、雁が連なって飛んでいるのが小さく見える様子は「をかし」で、烏がねぐらに帰ろうとして飛び急いでいる様子が「あはれ」なのか、想像できましたか。「しみじみとした趣」の「しみじみ」とは、対象の内面（心情）にあてているからでしょう。

▽まいて⑪＝まして

▽いと⑫＝たいそう　とても

▽はたいふべきにあらず⑬

はた＝また

いふべきにあらず＝言うまでもなく

※「ず」を連用形ととらえ、その後くるべき「をかし」が省略されているととらえる方が情緒がある。

▽つとめて⑭＝早朝

▽さらでも⑮＝そうでなくても

▽火など急ぎおこして、炭もて渡るも⑯、とあるが、誰のどこでの行為か？

女房（にょうぼう）宮仕えする女性使用人

・宮廷の廊下

▽つきづきし⑰＝似つかわしい　ふさわしい　似合っている

▽ぬるくゆるびもていけば⑱（已然形）**確定条件**

ぬるく＝なまあたたかく　ゆるやかに

※掛詞のように両方の意味合いを持つと考えて

だんだんと［寒さが］ゆるんでいくと

▽・灰がち⑲＝灰ばかり

▽わろし⑳＝よくない　みっともない　だらしない

☆なぜ、「わろし」なのか？

（早朝にあった何が、昼にはないのか？）

緊張感（引き締まった空気）がないから

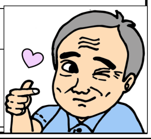
国語学習プリント　　　　date：　　年　　月　　日

学習内容：随筆の味わい　ー枕草子ー

＿＿年＿＿組＿＿＿番

春はあけぼの　その3

氏名



枕草子

清少納言

春はあけぼの

春はあけぼの①。やうやう②白くなりゆく
A山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲の
細くたなびきたる③。

夏は夜④。月のころはさらなり⑤、やみもなほ⑥、
蛍⑦の多く飛びちがひたる。
また、ただ一つ二つなど、ほのかに⑧
うち光りて行くもをかし⑨。雨など降るもをかし。

秋は夕暮れ。夕日のさして　B
B山の端⑫いと近うなりたるに、
烏の寝どころへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど
飛び急ぐさへあはれなり⑩。
まいて⑪雁などのつらねたるが、
いと小さく見ゆるは⑫、いとをかし。
日入りはてて、風の音、虫の音など、
はたいふべきにあらず⑬。

冬はつとめて⑭。雪の降りたるは
いふべきにもあらず、霜のいと白きも、
またさらでも⑮いと寒きに、火など急ぎおこして⑯、
炭もて渡るも、いとつきづきし⑰。
昼になりて、ぬるくゆるびもていけば⑱、
火桶の火も、白き灰がちになりて⑲わろし⑳。

【第一段】

ーー口語訳ーー

春は夜明け方（がいい〔がすばらしい〕）。だんだんと白んでいく山際が少し明るくなって、紫がかった雲が細くたなびいている（のは素敵である）。

夏は夜（がいい〔が風情がある〕）。月が出ていて（明るい）時は、言うまでもなく、（月の出ていない）暗闇でもやはり、蛍が数多く飛び交っている（のは趣がある）。また、たった一つ二つと、かすかに光って（飛んで）行くのも趣がある。雨などが降るのも（降る夜も）風情がある。

秋は夕暮れ（がいい〔が趣深い〕）。夕日がさして（その夕日が）山の端にとても近くなったころに、烏がねぐらへ帰ろうとして、三羽四羽、（そしてまた）二羽三羽などと飛び急ぐの（様子）はしみじみとした趣がある。まして雁などが列をなして（飛んで）いるのが、たいへん小さく見える様子は、とても風情がある。日がすっかり沈んでしまって、風の音や虫の音（ね）など（が聞こえてくるのも）また言うまでもなく趣がある。

冬は早朝（がいい〔が風情がある〕）。雪が降ったときはいうまでもなく、霜が降りて（辺りが）たいそう白い時も、またそうでなくても（白くなくても）とても寒い朝に、火を急いでおこして、炭を持って（廊下を）渡っていく様子も、とても似つかわしい。昼になって、だんだんと（寒さが）ゆるんでいくと、火桶の中の火も、白い灰ばかりになってみっともない。

教科書の訳

春はあけぼの。だんだんと白くなっていく山ぎわが少し明るくなって、紫がかった雲が細くたなびいているのがいい。

夏は夜。月の眺めのよいころはいうまでもない、月が出ていない闇の夜もやはり、蛍がたくさん飛び交っているのがいい。また、ただ一つ二つなど、ほのかに光って飛んでいくのも趣がある。雨などが降る夜もおもしろい。

秋は夕暮れ。夕日がさして、山の端がたいそう近くなったころに、烏が寝ぐらへ行こうと、三つ四つ、二つ三つなど急いで飛んでいく様子までしみじみとした感じがする。まして雁などが列になって飛んでいるのが、たいへん小さく見えるのはとてもおもしろい。日がすっかり沈んでしまって、風の音や虫の音が聞こえてくるのも言いようもないほど趣がある。

冬は早朝。雪が降り積もった早朝はいうまでもない、霜が降りて地面が白くなっているときも、またそうでなくても、たいへん寒い朝に、火を急いでおこして、炭を持ち運ぶ様子も、いかにも冬の早朝らしい。昼になって、寒気がだんだんぬるく和らいでいくと、火桶の火も白い灰が多くなってきてよくない。